

北欧＝最近障害者事情 第4回

フィンランド学力世界一の秘密

全国障害者問題研究会事務局長
日本障害者協議会理事

藺部 英夫

デンマーク語とスウェーデン語は似ているが、フィンランド語はだいぶ違う。ハンガリー語とともに日本語と共通するものがあるという。

「福祉制度だけで比較すれば1番はスウェーデン。2番がデンマークかな。フィンランドはずっと遅れるでしょうね。それでも日本に比べたら、比較にならないですよ」と通訳が笑った。



フィンランドは、十字軍以降はスウェーデンに、19世紀以降はロシアに支配された。独立は1917年、ロシア革命のさなかだ。第二次世界大戦では、中立国スウェーデン、ドイツに占領されたデンマークとは異なり、ナチス・ドイツと手を組みソ連に敗北。戦争犯罪国として多大な賠償金を支払った。52年、ヘルシンキ・オリンピックの年が福祉国家へのスタートの年だ。そして、90年代初頭、大不況が襲う。

しかし、その後10年余りで大きく飛躍する。今も、街には新しいビルが續々建設されている。欧州トップクラスの経済の推進役はIT産業だ。代表が携帯電話のノキア。「ノキア村」のゴム長靴工場が世界トップシェアをもつ巨大企業となった。そして推進役のもう一つが教育システムの確立だ。能力別でなく、すべての子どもに平等の教育をすることが基本だという。

1月8日朝8時半。訪問するオーロラ小学校は、ノキア本社のあるエスポー市にある。ヘルシンキに隣接したエスポーは人口22万人、フィンランド第二の都市だ。あたりはまだ暗闇の中にあり、白樺の木肌がライトに照らされて白く光る。

■平等な教育の徹底

オーロラ小学校は300人が学んでいる。教職員は40名。中学校は別の敷地にあり、新設される学校は小・中学校の9年制だという。

以下は音楽とパソコンが大好きな52歳の校長の話だ。

▼フィンランドの学力世界一位の秘訣を一言ではと

てもいえないが、言えることは、

- 1) すべての子どもたちが無料で教育を受けることができる(自治体ごとの学校差はない)。
- 2) 教員の専門的知識や技量のレベルが高く、研修が充実している。
- 3) 子どもたち(障害児はもちろん)へのサポート(制度も実践内容も)がいき届いている。遅れた子をおいていかない教育だから平均点が高い。
- 4) 現場に裁量があたえられ、力を出し切れる環境が整っている。授業時間数・年間カリキュラム・方法・人事も教員と父母が協議して決める。

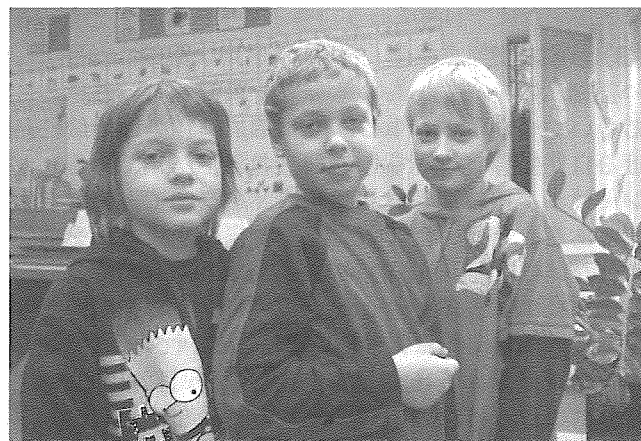
▼国の決める総合カリキュラムは網羅するが、その方法はそれぞれの学校で決める。本校の特徴は、①支援を必要とする子どもの教育、②芸術重視、③国語と算数に時間を当てていることだ。

▼テストはない。高校受験も大学受験もない。あるのは大学進学資格試験だけ。大学進学率は約40%。なりた職業の第一位は教師だ。

■どこまでも教育は無償

私たちの目的は、この学校で昨年からはまったインクルーシブ教育の視察だ。でも、こうした全体の教育のベースの上に、障害児を含めた教育実践の展開があるのだろう。

いろいろなクラスの授業を見せてもらった。国語



子どもたちはいい顔をしている

では鉛筆をもって直接書くことを重視している。図工や技術、家庭科など“手”を使う科目に重点がおかれていると聞いていたが、5、6年生の「木工室」は本格的で、女の子たちが、かっこいい専用のヘルメットをかぶって、一生懸命木工していた。噂のコンピュータ教育も低学年からパソコンルームは充実している。



「この学校の給食は質が高い！」と校長が自慢する給食は抜群においしかった。野菜は豊富で、焼きたてのパン、ジャガイモ煮、肉団子、牛乳も最高。山ほど料理を取る子もいれば、ちょっとの子もいる。給食を残す子は見つからない。

赤いカーテンの向こうには雑木林が広がる。テーブルには熊や犬などのぬいぐるみがある。子どもたちも先生たちも思い思いの場所に座り、会話が弾んでいる。給食はもちろん無料だ。

GDPでみた教育費の公私負担比率で、フィンランドは「公財政支出」が6.0、「私費負担」が0.1で世界5位だ。日本は12位だが、「公費」3.5、「私費」はなんと1.2。フィンランドの12倍だ。

■全校集会で知るフィンランド教育の奥深さ

訪問した日はクリスマス休暇明けの初日。全校集会があるというので、みんなは小さな体育館に集まっている。

壇上にバンドが現れていきなり演奏が始まった。メインボーカルは若い障害児担任のハンナ先生。子どもたちもいっしょに歌い出す。エレキギターを弾いているのはあの校長先生だ！

さて歌が一曲終わって、校長が生徒たちに静かに語り始めた。すると大きな箱からクリスマスツリーの赤い飾り玉を出した。

「誰か前へ出てこれを持っててくれるかな？」

「ハイハイ！」

手を挙げる大勢の中から一人の子が前に。次はスキー板・植木鉢・コップ・バットと続く。つぎに、



小さな体育館での全校集会

白い紙に大きく数字を書いた紙を持ってくれる子をモノを持っている子たちの間に立てた。

「これから始まる新学期の行事と、その間隔は何日ですよということを説明しています」。通訳がさやいて教えてくれた。

子どもたちが戻ると、校長は、エイヤア！と舞台に飛び昇ってギターをとった。バンド演奏が始まって、みんなでまた一曲すてきな歌を歌った。

これがすべてだ。わずか10分余りの全校集会。この教員集団の実践力と子どもたちの集中力にフィンランド教育の奥深さを感じたものだ。

■排除しない教育の平等と質

「平等を保障する制度は、フィンランドの教育制度の礎となるもっとも大切な原則です。質と機会の平等は矛盾するものではなく、片方が片方を可能にするものなのです」。

29歳で就任し、日本の旧教育基本法などに学び、10年間で教育制度を確立した元教育大臣の言葉だ（『NHK未来への提言 オツリベッカ・ヘイノネン「学力世界一」がもたらすもの』）。

「排除しない（エクスクルージョン）」ことの対極にある「インクルージョン」の思想と制度がフィンランドの教育には徹底されている。（つづく）